蠶のかへるは蛾也、皆かはる意也、

〔倭訓栞前編十二〕すもり　倭名抄に鵲をよめり、巣守の義也、

〔百千鳥下〕玉子開りの事

先小鳥の類、虫餌を喰ふ物は、玉子十三日にて開ル、又から餌計喰て虫類を喰ぬ鳥は、十六日にて開る、鳩の類も皆十六日也、又大鳥に至りては其鳥々々にて日數違、日數のびるも有、よく開時もあり、先たいがいの日取を印す、孔雀は玉子廿八日にて開、からくんも廿八日にて開、鵝三十日にて開、高麗雉子は廿四日にて開、錦鷄は廿三日にて開ル、白鵬は廿五日、又六日かゝる也、ばりけんは三十四五日にて開る物にて長し、總體かくのごとくと言共、寒き年は日數延る事あり、夏氣に成ては又早く開る事有、然ども此日取を用ひて違ひなし、○略中

玉子むきやうの事

是は幾度も手がけざれば知れぬもの也、玉子開日の前日、玉子の頭のかたの横の所、内より嘴の當るところに押出したるやうに穴出來る也、右の嘴の穴之所を見るに、上のから取れば、内革計あり、時に此内皮黄いろに成たるは、嘴へとゞ付、其子は開割かねる物也、右氣を付てよく〳〵見るがよし、右のごとく黄色になりたるは、此方にてむくがよし、口の明たる其夜か、又翌朝むく也、大分此所見樣むきやう、度々手懸ざれば知れぬ物なり、むく折血多出る事あり、少しもくるしからず、又素人はむきかけて、半分にして巣鳥の腹へ入る事あり、是は猶々惡し、皆むき中より子を出し、其まゝ巣鳥の腹へ入るがよし、しばらくは首をなげてよはりたる樣に見ゆる物なれども、二時計立時は、毛かはき隨分達者に成る物也、此むく玉子むかざる玉子にて、大分子を落す事有もの也、くはしくは口傳すべし、書取がたし、先此趣にて考る時は、好人はおのづから覺ゆ物也、小鳥にはなし、大鳥の巣鳥にて玉子かへす類ひ計の事也、又玉子むきたる時臍の緒いまだ納ざる